

# 高田早苗『美辞学』の中国古典要素について

張 倩  
張 偉 雄

## 初めに

明治大正期の日本の修辞学、特に早稲田大学が中心に形成された日本近代の修辞学研究は中国近代の修辞学にも大きな影響を与えていた。日中の修辞学交流研究を行うには、早稲田大学における修辞学草創期の源流に関する考察が必要となる。かつて早稲田大学学長も務め、憲法史、行政法、英国憲法史、貨幣論、租税論、欧米史などを担当していた高田早苗は、近代日本の修辞学創設に大きな功績を残した人である①。

高田早苗（1860年4月4日—1938年12月3日）、号は半峰という。早稲田大学学長、明治・大正・昭和期の政治家、政治学者、教育家、文芸批評家。衆議院議員、貴族院議員、文部大臣などを歴任した。若い頃、高田は官立の東京英語学校（のちの一高）で英語を学び、大学予備門を経て、明治15年に東京大学文学部哲学政治学及理財学科を卒業。大隈とともに東京専門学校（現在の早稲田大学）の設立に参加し、1907年早稲田大学初代学長に就任した。1915年5月貴族院議員に勅撰され、8月には第2次大隈重信内閣の内閣改造で文部大臣として入閣した。その功績をたたえ現在早稲田大学に「高田早苗記念研究図書館」が設置されてある。

高田早苗は1889年に『美辞学』②という書物を書き上げ、近代日本修辞学の先駆的な作業としてその名を残している。本書は早稲田乃至日本の修辞学体系の形成に基礎を作ったとも言える存在である。高田早苗の『美辞学』は西洋の修辞学理論を参考にしていたが、それ以前日本人の修辞学関係の書物とは違い、西洋の修辞学理論の単純な紹介や翻訳ではなかった。注目すべきことは、高田は本書の中で西洋の修辞学理論を吸収したうえ、自分の理論を作り、それを立証するために、大量の中国古典を引用していたのである。これらの中国古典は

高田修辞学理論をサポートしていると同時に、西洋とは違う東洋に存在している文章作法と西洋の修辞との比較を喚起し、東西修辞手法の異同を考えさせるきっかけともなったのである。

日本の修辞学研究は明治時代から盛んになり、修辞学に関する研究者には高田早苗、島村瀧太郎（抱月）、五十嵐力などがいた。これらの研究者はみんな東京専門学校（早稲田大学）で教鞭をとっていた方々である。早稲田大学が近代日本の修辞学研究において重要な位置を占めていたものである。

以上のような「早稲田修辞学」学派の出現以前に、いくつかの修辞学に関する書物も世に現れていた。代表的なものに尾崎行雄訳の『公会演説法』（丸善 明治10年）、菊池大麓編訳の『修辞及華文』（丸善 明治12年）、黒岩大（黒岩涙香）訳『雄弁美辞法』（与論社 明治15年）などがある。しかしこれらの書物はほとんど西洋の修辞学の翻訳に止まっていた。従って1889年に至って現れた高田早苗の『美辞学』が近代日本の修辞学の第一作と言えるものである。

本論では、高田早苗の『美辞学』（前編）を考察の対象とし、まず『美辞学』の概要を示したうえ、書中の中国古典引用の実態をいくつか取り上げて、これらの引用は高田早苗が日本的美辞学創設に際してどのような役割を果たしたのかを探り、高田美辞学観を究明するきっかけとしたい。

## 一、高田早苗『美辞学』の概要

高田早苗著『美辞学』は明治22年金港堂によって出版されました。前編十六章、後編七章からなっている。目次は次の通りである。



### 『美辞学』目次

(前編)

- 第一章 総論
- 第二章 嗜好 (Taste) を論ず
- 第三章 嗜好の快樂を論ず
- 第四章 崇高 (Sublime) を論ず (第一)
- 第五章 崇高を論ず (第二)
- 第六章 優美 (The Beautiful) を論ず
- 第七章 可笑 (Ludicrous) を論ず (第一)

- 第八章 可笑を論ず（第二） 談諧（Wit）
- 第九章 可笑を論ず（第三滑稽（Humour）及び嘲諷（Ridicule）
- 第十章 脩飾（Figure）を論ず（第一）
- 第十一章 脩飾を論ず（第二）
- 第十二章 脩飾を論ず（第三）
- 第十三章 文體（Style）を論ず
- 第十四章 文體に缺く可からざる要素を論ず（第一）
- 第十五章 文體に缺く可からざる要素を論ず（第二）
- 第十六章 文體に缺く可からざる要素を論ず（第三）
- （後編）
- 第一章 総論
- 第二章 散文を論ず（第一） 記事文
- 第三章 散文を論ず（第二） 叙事文
- 第四章 散文を論ず（第三） 解釋文
- 第五章 散文を論ず（第四） 誘説文
- 第六章 韻文を論ず（第一）
- 第七章 韻文を論ず（第二詩歌の種類）

『美辞学』の各章の要点は次のとおりである。第一章の総論においては、美辞学の定義、美辞学研究の利益、美辞学の応用について論じている。第二章と第三章においては、人々は嗜好があり、この嗜好より快樂を求めて満足を得ようとすることを望んでいることを指摘し、嗜好の人による異同、嗜好の種類、嗜好の標準、そして「美辞学」においての嗜好の二性質「精緻」「正確」について論じた。その上に、嗜好を満足させるための三個の要素「崇高、優美、可笑」を指摘し、また嗜好と視聴覚器官との関係についても論じた。

第四章から第九章にかけて、上の章を受け「崇高、優美、可笑」について論を展開した。崇高については、高田早苗は「凡そ物広大無辺壯快雄偉にして之を望む者をして快活ならしむる時はこれを崇高といふ。」③これらの章において、高田は崇高の快樂、崇高の原因、視聴覚に関する崇高などについて、具体的な文章にそって論を展開した。優美と崇高の違いについて高田は、両方とも「嗜好」に快樂を与えるものであるが、崇高により生ずる快樂のほうが「強大」であり、反対に優美から得た快樂は「永続」である。また崇高から来る快樂は「凄惨」であるのに比べて優美から来る快樂は「静平温和」④であるという。「可笑」

について高田は「可笑もまた崇高優美と同じく人の嗜好に快樂を与ふるものなり」と示し「可笑」の発生について「一は事物がその適宜を失せるを以て可笑の原因となし他は事物の貶低を以て其原因となす者なり」⑤と定義している。

第十章から第十二章にかけて、「修飾」について論じた。高田は修飾について「美辞学上にいふ所の修飾とは言文の意義を明晰にし其効験を増加せんがために故さらに通常の語法を変化するをいふ」⑥と定義している。美辞学でいう修飾のメリットについて高田は四つあげている。一、言葉を豊かにすることができる。二、文体を高尚にすることができる。三、比喩によって読者に一時的に二つの物事を理解させることができる。四、文章の意味をもっと分からせることができるなどと指摘している。

第十三章から第十六章にかけて、文体についての論である。文体について高田は「文体とは言語若しくは文辞を以て思想を表明せんがために著作家の用ふる所の格段なる方法をいふ」⑦と定義している。文体の種類について十一種類に分けている。それは次の通りで、乾燥体、素朴体、淡泊体、文雅体、華麗体、単純体、過巧体、簡約体、蔓衍体、雄健体、軟弱体などである。以上見てきたように高田早苗の『美辞学』には修辞学の定義、効用を示し、また美辞学の使用方法について具体的な事例を用いて論を展開している。そして高田早苗が以上の論を証明するために中国古典の利用を最大限にしていたのである。

## 二、中国古典の引用状況

高田早苗の『美辞学』は明治初期において他の修辞学関係の本がほとんど翻訳ものであるのに比べて、はじめて翻訳ものではなく日本人による修辞学の自著であると言われている。武島又二郎「我国の学問は之を西洋と比べて、皆釋容あるが中に、修辞学の如きは其甚しきもの一つ也。之を邦文もて著述したるもの、明治二十一年に成りたる高田早苗氏の美辞学のほか、今日に至るまで、一の注意に足るべきもの出たるを聞かず」⑧と指摘していた。『美辞学』には西洋の学問から影響は顕著で西洋の美学思想、美学理論、弁論術、レトリック論などが盛り込んでいる。また高田早苗は彼の修辞学理論を証明し、具体的な使用法を論証するために、大量の中国古典の引用を行っていた。この点について高田早苗は「緒言」において次のように書いている。

「バイン、ホエートレー、カッケンボッス諸氏の美辞書に拠り又ヘブン、ケー

ムス、アンガス、バアザーレ、コックス諸氏の著書を参考して以て新たに叙述の次第を編成し之に附するに嘗て和漢の書を読むに當り注意して抄録し置きたる所の例証を以てしたり是れ斯書の成れる所以の大略なりとす。」⑨

高田早苗は「和漢の書を読むに當り注意して抄録し置きたる」と書いているように、『美辞学』においてそのように準備していた中国の古典を多く事例として引用されている。その中でも中国唐中期を代表する文人、唐宋八大家の一人である韓愈からの引用が一番多かったことで11箇所引用があった。その次に多いのは司馬遷の『史記』からの引用で10箇所あった。

以下高田早苗の中国古典引用の一覧を整理しておく。『美辞学』前編後編合わせて73箇所の引用があった。

出典	ページ
韓愈 「猛虎行」	P26-27 (前編)
「張中丞傳後序」	P46 (前編)
「毛穎傳」	P95 (前編)
「争臣論」	P113 (前編)
「雜説」	P130-131 (前編)
「送殷員外使回鶴序」	P146 (前編)
「伯夷頌」	P150-151 (前編)
「争臣論」	P155 (前編)
「與孟尚書書」	P155-156 (前編)
「争臣論」	P156 (前編)
「伯夷頌」	P164 (前編)
「送李愿歸盤谷序」	P206 (前編)
「畫記」	P19-21 (後編)
「論佛骨表」	P87-88 (後編)
「諱辯」	P91-93 (後編)
司馬遷 「伯夷傳」	P45-46 (前編)
「荆軻傳」	P47-48 (前編)
『史記』	P88 (前編)
『史記』	P148 (前編)
「陳涉世家」『史記』	P149 (前編)

	「平原君列傳」	P49-52 (後編)
	「貨殖傳」	P55-57 (後編)
	「楚世家」『史記』	P97 (後編)
	「蘇秦列傳」	P99 (後編)
	「范雎列傳」	P99 (後編)
蘇軾	「石鐘山記」	P60 (前編)
	「日喻」	P87 (前編)
	「後赤壁賦」	P114 (前編)
	「策畧五」	P69-70 (後編)
范曄	「昆陽之戰」『後漢書』	P36 (前編)
	『後漢書』	P47 (前編)
	『後漢書』	P144-145 (前編)
柳宗元	「與韓愈論史官書」	P164 (前編)
	「至小邱西小石潭記」	P24 (後編)
	「與韓愈論史官書」	P93-94 (後編)
李白	「蘇台覽古」	P62-63 (前編)
	「襄陽歌」	P124 (前編)
	「秋浦歌」	P154 (前編)
	「春夜宴桃李園序」	P170 (前編)
范仲淹	「岳陽樓記」	P25 (前編)
	「岳陽樓記」	P23 (後編)
曹植	「洛神賦」	P57 (前編)
	「君子行」	P148 (前編)
王安石	「讀孟嘗君傳」	P104-105 (前編)
	「陰漫漫行」	P171 (前編)
李陵	「答蘇武書」	P35-36 (前編)
許渾	「咸陽懷古」	P60 (前編)
卓文君	「司馬相如誅」	P67-68 (前編)
魏勺庭	出典不詳	P70-71 (前編)
白居易	「長恨歌」	P71-72 (前編)
元稹	「聞樂天授江州司馬」	P74 (前編)

陳玉蘭 「寄夫」	P75 (前編)
敖陶孫 「詩評」	P118 (前編)
王世貞 「觚不觚录」	P149 (前編)
王維 「老将行」	P151 (前編)
杜甫 「徐卿二子歌」	P153 (前編)
李華 「吊古戰場文」	P174 (前編)
徐偉長 「法象論」	P67-68 (後編)
魯共公 「酒味色論」	P82-83 (後編)
司馬相如 「上諫獵書」	P83 (後編)
『今世説』	P96 (前編) P103-104 (前編)
『論語』	P147 (前編) P165 (前編)
『孟子』	P147 (前編) P156 (前編)
『戰國策』	P162 (前編) P88-89 (後編)
『洛蜀党議』	P89-90 (前編)
『詩經』	P114 (前編)
『礼記・緇衣』	P121 (前編)
『三朝北盟会編』	P123 (前編)
『大学』	P165 (前編)

この一覧表から分かるように、高田早苗は中国古典の造詣が非常に深く、広い知識を持っている。このような深い中国古典の教養が彼の理論を支え、そして大量な中国古典の事例が彼の『美辞学』の成立を支えているのである。

### 三、中国古典引用の効果

以下いくつかの角度で『美辞学』における中国古典引用の特色について探ってみる。自然界の広大さ、そしてそれを描くことによって崇高の念を表わす修辞的有効性について、高田は範仲淹の『岳陽樓記』を使用した。また、森巖、

勇壮、悲哀、憂愁の心情を表す修辞手法の事例として、李陵の『答蘇武書』を示した。さらに徳義上の崇高の情を醸し出す作法として司馬遷の『伯夷列傳』を引用した。

### ① 広大な描写『岳陽樓記』

高田早苗が修辞学的「崇高」について論じたとき、自然現象の廣大無辺、壮快、雄偉が人々の快活を引き起こすことで、「崇高」と感じると定義している。崇高の念を抱かせる対象について高田は次のように指摘している。「崇高の生じる原因は専ら勢力の発動に在るを以て電光、霹靂、激浪、怒涛、火山、地震、猛獸、戦争等の如き現象は皆崇高の部に属すべきものなる事勿論なり」⑩という。この論を証明するために、高田は中国の古典から中国北宋の政治家、文人范仲淹の散文『岳陽樓記』の一節を引用していた。

「霖雨霏々。連日不開。陰風怒號。濁浪排空。日星隱曜。山岳潛形。商旅不行。檣傾楫摧。薄暮冥々。虎嘯猿啼。登斯樓也。則有去國懷鄉。憂讒畏譏。滿目蕭然。感極而悲者矣。……」（岳陽樓記 范仲淹）

岳陽樓は湖南省岳陽市の西門城頭にあり、唐代開元四（716）年の建立である。宋代慶曆五（1045）年、岳陽樓は再建され、範仲淹が『岳陽樓記』を作った。この文に「先天下之憂而憂、後天下之樂而樂」（天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ）という名句があり、日本にもかなりの知名度がある。高田早苗はこの文をもって、「崇高」の気持ちを引き起こす「廣大」の迫力を示そうとした。

范仲淹の散文には次のようなダイナミックで広大な描写が展開している。長雨が降り続き連日晴れやらず、陰気な風が唸り、濁った波が空をつく。太陽も星も光を隠し、山岳も姿を潜める。行商人や旅人も足止められ、帆柱は傾き楫は砕ける。闇深く虎は嘯き猿は啼く。この樓に登れば故郷を思い、世の非難になやみ、目の前には物寂しく、感極まり悲しむものである。このダイナミックで広大な描写の期待する効果について高田はこのように書いている。

「廣大といふ事、崇高の最も簡明なる状態なり、かの原野の渺漠たる、江海の汪洋たる、蒼天の茫々たるが如き是れなり。夫れ際限無き事物は余輩之を思念する能はず。是を以て畏怖の心生じ崇敬の念起きる。」⑪



高田早苗は范仲淹の『岳陽樓記』で描かれた風景をイメージし、それが彼の脳裏にある「原野の渺漠、江海の汪洋、蒼天の茫々」と結びついた。このような描写が修辞学的に人々に「畏怖の心生じ崇敬の念」を引き起こす効果があると理論的にまとめた。このように高田早苗は自分の豊かな漢文の教養を活用して西洋の修辞学的な理論を検証する努力をしていたのである。

## ②森厳、勇壯、悲哀、憂愁などの観念『答蘇武書』

「崇高」の情を引き起こす効果的な文章として、高田早苗はまた以下の五つの描写は効果的だと指摘している。それは、一、危険の観念。二、強大な勢力。三、森厳、勇壯、悲哀、憂愁などの観念。四、猛獣悪鳥の音声。五、畏懼、悼痛、震怒などのための激昂した人類の音声などである。<sup>⑫</sup>

これについて高田は、中国前漢の軍人で匈奴を相手に勇戦したが、後に匈奴に帰依した悲運の将軍李陵、そして同じ頃匈奴に捕らえられ、厳しい環境の中19年にわたり匈奴に和すことなく耐えてきた蘇武の二人のやり取りにある書簡『答蘇武書』を事例に使用した。以下は高田早苗のこの書簡からの抜粋である。

自從初降。以至今日。身之窮困。獨坐愁苦。終日無覩。但見異類。韋鞞毳幕。以禦風雨。羶肉酪漿。以充饑渴。舉目言笑。誰與為歡。胡地玄冰。邊土慘裂。但聞悲風蕭條之聲。涼秋九月。塞外草衰。夜不能寐。側耳遠聽。牧馬悲鳴。吟嘯成群。邊聲四起。晨坐聽之。不覺淚下。嗟乎子卿。陵獨何心能不悲哉。(答蘇武書 李陵)

匈奴に降伏して以来、身心ともに追いつめられ、孤独と苦しみに苛まれ終日見るべきものもなく、眼に入るものは異郷の異物だけだ。革製の衣服とフェルト製の天幕で風雨をしのぎ、生臭い羊の肉、乳酪で飢えと渴きを満たす。談笑しようにも、誰とすればよいのか。異国の暗い冬水雪が降り辺土は凍り裂け、聞こえるのは悲しい風の音のみ。涼秋の九月には、塞外の草木は枯れてしまう。夜は眠れず、耳を立て遠く聞こえるものは、牧馬の悲しげな嘶きであり、音がまざりあい四方漂う。早朝これを聞くと、涙があふれてとまらない。ああ子卿(蘇武)よ、この李陵の心はどうして悲しまずにおられようか!

この書簡は、最後に蘇武が英雄として帰国を果たしたときに、李陵を誘い共に帰国することを求めたときの書簡に対する返信である。反逆者の汚名を着せ

られた李陵は複雑な気持ちに悩まされ遂に帰国することを断り、辺境の地で一生を過ごす決心をした。その故郷を思い、異国での苦しみを耐える悲壮な気持ちだが、この書簡によって如実に訴えられている。この書簡は修辞学的に見れば強力な感化力が潜んでいる。異国に捕られている身としての「危険な観念」、前漢における匈奴の「異民族の強大な勢力」がこの書簡の背景となっている。この背景に基づいて書簡全体から主人公の「森厳、勇壯、悲哀、憂愁などの観念」が滲み出している。異国を抜け出して母国に帰ることのできない無情な現実から、主人公が「畏懼悼痛震怒」の気持ちで「激昂」していると容易に理解できる。このような描写は「崇高」の情を引き起こす効果的な文章として、高田早苗が挙げた修辞学的な五つの描写とぴったり合致している。この合致には高田早苗の『美辞学』理論構築の方法論の一端を探る要素が潜んでいる。この効果的な事例引用から見て、或いは当時の教養人の漢学の造詣から考えて、高田早苗の修辞学的理論の形成には、多くの場合は蓄えている漢文からの事例が先行して後に西洋的な修辞学に出加え、そしてその両者の接点から自らの理論を構築しようとするのが見える。

### ③徳義の崇高『伯夷列傳』

「崇高」の情を醸し出す描写について高田早苗は「嘉賞す可き行為より生じる所の崇高あり、称して徳義上の崇高」⑬という。これについて高田は四つの種類に分けている。一、正義眞理を固守して動かざること。二、他人のために一身を犠牲とすること。三、危難の時に際して自若たる事。四、忠君愛国の事蹟などである。以上の論に当てはまる人物として、高田は古代中国殷代末期の孤竹国の王子の兄弟で、高名な隠者、儒教では聖人とされる伯夷・叔斉を取り上げた。

この事例は司馬遷の『史記・伯夷列傳』から出ている。伝記によると、伯夷が長男、叔斉は三男である。父親から弟の叔斉に位を譲ることを伝えられた伯夷は、遺言に従って叔斉に王位を継がせようとした。しかし、叔斉は兄を差し置いて位に就くことを良しとせず、あくまで兄に位を継がそうとした。そこで伯夷は国を捨てて他国に逃れた。叔斉も位につかずに兄を追って出国してしまった。国王不在で困った国人は次男を王に立てた。旅に出た二人は周の文王の良い評判を聞き、周へむかった。しかし、二人が周到着したときにはすでに文王は亡くなっており、息子の武王が帝辛（殷の紂王）を討とうと軍を率いてい

る途中だった。それで次の描写が出てくる。

西伯卒、武王載木主、號爲文王、東伐紂。伯夷・叔齊叩馬而諫曰、父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎。左右欲兵之。太公曰、此義人也。扶而去之。武王已平殷亂、天下宗周。而伯夷・叔齊恥之、義不食周粟。隱於首陽山、采薇而食。及餓且死、作歌。其辭曰、登彼西山兮、采其薇矣。以暴易暴兮、不知其非矣。神農・虞・夏、忽焉沒兮。吾安適歸矣。于嗟徂兮、命之衰矣。遂餓死於首陽山。(伯夷列傳 司馬遷)

西伯は亡くなり、其子の武王は、西伯の木像を車の上に載せて、文王と稱へ、東方の殷の紂王を征伐しようとした。伯夷、叔齊は武王の馬を止め、諫めて云った。「父君卒去し未だに葬禮も執り行われていないのに、今や殺伐の干戈に及ぶのは、孝と申されようか、臣下の身分で君を殺すのは、仁と申されようか」と。左右の武士はそれを見て殺そうとした。太公望進み出で「此の二人は實に義を守る人である」と連れて行かれた。武王は殷の亂を平定し、天下皆周に服従することになった。しかし伯夷、叔齊は、その無道に耻しく思い周の米を受けずに首陽山に隠れて、山の薇などを取って食べ後に飢餓した。そのとき歌を作った。「あの西の方の山に登り、薇を採り暮して居る。武王は暴虐をもって、紂王が暴虐だとして殺した。己れの悪しきことを自覺できていない。昔しの神農氏や虞や夏が無くなつてしまい、我等は何處に身を寄せようか。運命の衰えたことかな」という。二人はついに首陽山に餓え死した。

以上のような『史記』の中の話は、高田早苗にとって、非常に魅力的な話のようである。命をかけて信念を守り通した人物の模範として、時代とともに語られ多くの人を魅きつけてきた。この事例はまさに高田の証明したい理論「崇高の情を醸し出す」描写として最適なものである。これは「嘉賞す可き行為」の典型である。伯夷、叔齊は「正義心理を固守して動かざること、他人のために一身を犠牲とすること」の象徴として、高田早苗はそこから、修辞学的な効果を見出した。それは「徳義上の崇高」の描写の修辞学的効果を説明するのに非常に有効な事例である。以上見てきたように、高田早苗は『美辞学』を作成するに当たり、西洋のレトリックの理論に対して、東洋の事例で当てはめていき理論づけしていたのである。高田早苗はこのような手法で日本における新しい「美辞学」の構築を努力していたのである。

## 終わりに

高田早苗が東洋の文学現象を以て西洋のレトリックを「美辞学」として検証し、東洋的修辞手法の有効性を例示するという、日本の修辞学を構築する方法は非常にユニークなもので、且つ方法論的にも有効なものである。これは東洋の読者に比較の角度で西洋のレトリックを理解させる方法を提供してくれた。このような方法を採用するに当たり、高田にはその有効性について、次のように考えていたのである。「真理は素と一なり。故に西洋美辞学の法則を移して以て東洋の文学上に応用せん事決して障碍あるべからず去れば余が此著を為すに当たりては勉めて例を和文漢文に取り美辞学の法則を以て之を照したり。」<sup>⑭</sup>という。この説明は正に高田の『美辞学』執筆の方法論である。彼はこの方法論によって東洋人の西洋的な美辞学への接近を容易にさせた。また西洋の美辞学に対する興味関心を喚起することができた。さらに「西洋美辞学の法則を移して以て東洋の文学上に応用」することができることをも証明できたのである。

高田早苗は『美辞学』の緒論において美辞学、レトリックの西洋での歴史と現状について次のように書いている。「美辞学は在昔希臘に起り羅馬に最も盛んにして下って西洋各国に伝播せり。是を以て西洋の諸大家滔々の弁を振り、堂々の文を草するに当りては概ね皆此学の法則に適従するのみならず、其辯を聞き其文を読む者も亦この法則に従ふ者多し。」<sup>⑮</sup>高田は西洋の修辞学、文章作法に非常に大きな関心を持っていた。西洋の文章家、読者に対して高く評価していた。高田の評価する理由としては、西洋人には「美辞学」の法則に従って文章を書き、読者もまた美辞学に従って文章を読み解くのだからである。一方西洋と比べて東洋の日本や中国には「美辞学」という概念とは違う方法で文章の推敲をしていたのだと高田は認識している。近代化の中で西洋に対応するためにも高田早苗は日本における「美辞学」提唱の必要性を強く感じていた。かれは自ら『美辞学』を著し、これによって東洋の伝統に立脚する「美辞学」の創立を試みたものである。

高田早苗は『美辞学』において大量の中国古典を引用して、西洋の美辞学、レトリックを消化し説明した。本論では触れていないが、高田早苗はまた日本の古典をも多く使っていたのである。今後の課題としては日本の事例をも踏まえて、書中の高田の事例引用は、どのように西洋理論の解説、証明に結んでい

くのか、東洋の事例と西洋の理論との結びつきの有効性と限界とは何か、比較研究的な角度でさらに考察していきたいと思う。

**注：**

1. 速水博司『近代日本修辞学史』有朋堂 昭和63年 p56参照
2. 高田早苗『美辞学 前編・後編』金港堂 明治22年
3. 同上 p22 (本論の『美辞学』からの引用に関して漢字は新字体に変換されている。
4. 同上 p49
5. 同上 p79
6. 同上 p109
7. 同上 p175
8. 武島又二郎『修辞学』明治三十一年 博文館 緒言  
なお明治初期「早稲田美辞学の系譜」について原子朗『修辞学の史的研究』早稲田大学出版部 1994年 p45-104に詳しい。
9. 高田早苗『美辞学 前編・後編』金港堂 明治22年 緒言
10. 同上 p22
11. 同上 p22-p23
12. 同上 p34-p35
13. 同上 p38
14. 同上 総論 p 7
15. 同上 総論 p 6

※本論文は張倩さんが中心にまとめられ張偉雄が意見を加えたものである。